「蛹の怪獣」が生まれ落ちてから既に三時間が経過しようとしていた。あの蛹を中心に、周囲の砂塵化は刻一刻と進み、街は砂海の波へと呑まれてゆく――――

◇◇◇

「それじゃあ、今後の方針を決めていこうか」

夕星達をブリーフィングルームへと集めた未那月は、開口一番にそう切り出した。

幸いにも近隣住民の避難こそスムーズに進んでいるようだが、広がり続ける砂塵化は止まることを知らない。

ARAsの見解によれば、七二時間後には天川市が、一二〇時間後には日本全域が砂に埋もれると予想された。加えて、急激な現実固定値の変動は世界にも大きな負荷をかけることにも直結する。

それはやがて原因不明の異常気象や怪奇現象という形をとって、少しずつ世界を蝕み始めたのだ。

砂の底へと、誰かの日常が沈もうとしている。エゴシエーター能力の暴走と、それが齎している惨状に夕星は改めて恐怖を覚えた。

「俺の力のせいで、」

「そういうのは後にしようぜ、夕星。それにだぜ」

敢えていつもの調子を気取りながら、声をかけてくれたのは十悟だ。

「あのデッカい蛹をさっさと陽真里ちゃんに戻しちゃえばいいってことだろ？　それこそ街が砂に沈んだり、蛹の中からヤバい奴が出てきたりする前にさ」

「その通りだよ、鳥居くん。というか、君もナチュラルに混じってくるんだね」

「夕星みたいな偏屈者とも仲良くなれるのが俺の取り柄っすから。よろしくお願いしますね、未那月センセ」

「ふふっ。こちらとしても人手が多過ぎる分には困らないからね。頼もしい限りだよ」

閑話休題。議論を本題に戻すために、未那月は一枚の資料を広げてみせた。

そこには上空から撮影したであろう蛹の怪獣の写真が添付され、さらに蛹の中央には意味深にチェックマークが付けられている。

「この印は……？」
「分解された砂塵はこの一点に集約されているんだ。この怪獣の中核（コア）と表するのが適切かな」
ならば不要な部分を除去し、コアを切り離すことが出来たなら、ひとまずはあの怪獣を無力化することができるということか。
夕星は脳内でイメージを描いた。自分の操る〈エクステンド〉ならば造作のないことだと。〈エクステンド〉の修理も急ピッチで進行されていた。曰く、整備スタッフ達からは悲痛の声が上がっているようだが、それでも明日の早朝には機体も晩年の状態に仕上がるらしい。
「加えて、藤森（ふじもり）委員長はこのコアに閉じ込められている可能性が高いと思うんだ」
ＡＲＡｓの保有するドローンで蛹の全容を調査した結果、計器が砂塵化する寸前でコアから発信されるＧＰＳの信号が拾われたらしい。
彼女を保護して貰うために夕星が握らせた、あのネクタイピンのＧＰＳ反応だ。
「ナイスじゃんか、夕星！」
十悟がパチン！　と指を弾いた。
「それじゃあっすよ。あの蛹からコアの部分だけを回収できれば陽真里ちゃんを元に戻す方法も見つかるかもってことですよね」
未那月も頷くことで肯定の意を示してくれた。
二人が提示してくれた可能性は大きな希望だ。再び彼女を「日常」の世界に戻せるというのなら、躊躇うこともない。――――夕星は決意で拳を固く握り締めた。
だが、その希望を摘み取ろうとするのも未那月だ。彼女の表情からは笑みが消え、真剣な表情で「ただ、」と付け加えた。
「ただ、一つ問題もあるんだ」
彼女が提示する二枚目の資料。そこには蛹の内部に高密度に圧縮されたエネルギーが秘められているという旨の記載があった。
「彼女は今、蛹の中で『世界を壊す存在』に生まれ変わろうとしているんだ。だったら相応のエネルギーを秘めていてもおかしくはないだろう」
「それじゃあ……下手にあの蛹に攻撃を加えようとしたら、」
「ドカン！　と全部ぶっ飛んじゃうだろうね」
そうなれば、陽真里を元に戻せる可能性も潰えてしまう。
夕星は再び、頭の中でイメージを描いた。なんらかの手段で爆風を相殺できないか？　と。
例えばだ。意図から外れたエゴシエーター能力の暴発を防ぐため、あくまで限定的に「どんな衝撃」も防いでしまう盾が欲しいと願ったとする。その盾で被害を抑え込むことが出来るのではないだろうか。
「だったら俺と〈エクステンド〉が、そのエネルギーを受け止めるのはどうでしょうか。俺

のエゴシエーター能力で壊れない盾を作れば、」
「いや、それじゃあダメだろ。お前が盾を用意して衝撃に備えるなら、誰があの蛹からコアを抜き取るんだよ」
十悟の指摘通り、肝心なことが頭から抜け落ちていた。
「あっ……」
夕星が立てた作戦を実行するには、少なくとも二機の〈エクステンド〉が、或いは二名以上のエゴシエーターが必要になるのだ。
「たく、陽真里ちゃんのピンチなんだからもうちょっと真面目に考えたらどうだよ」
「なっ……！　これでも俺は真面目に考えたつもりなんだぞッ！」
もう、そこからは悪友二人の売り言葉に買い言葉だった。やいのやいのと言い合いを始めた二人を傍目に、未那月が掌を打つ。
「そこまでだ、二人とも。それに私は神室（かむろ）くんの作戦は結構アリだと思う。問題なのはもう一人強力なエゴシエーターが必要になるところだが……まぁ、それも問題はないはずさ」
彼女はほくそ笑んで「昔よしみに頼んでみよう」と続けてみせた。
だが、「彼女の昔よしみ且つエゴシエーター」という条件に該当する人物など、一人しかいない。
エゴシエーター殺しの「魔女」竜胆麗華（りんどうれいか）――彼女との共闘することこそが作戦の第一関門であった。